



Title	上方の地名
Author(s)	鏡味, 明克
Citation	懐徳. 1983, 52, p. 65-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90615
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上方の地名

鏡 味 明 克

一 はじめに

地名の問題をここでは上方ことばの一環としてとらえ、地名の上方らしい個性をさぐり、その価値あるところを大切に希望を述べたいと思う。地名というと、それぞれの古い地名の語源が話題になることが多いが、ここでは語源のわからない地名に新説を出すことよりも、地名の歴史的価値とその上方における現れ方、その望ましい受け継がれ方などを展望し、上方文化としての今後の新しい創造への期待を述べたいと思う。

まず「上方」という地名そのものから話をはじめたい。上方とはいうまでもなく古来の王城の地としてのカミであり、都から地方へは「東下り」とか「北国下向」（『平家物語』）など、クダルのであって、都へは、ノボ

ル、上洛であった。とくに九州はシモの地方の代表とされ、『日葡辞書』では Ximo の注記で多くの九州方言を採録している。都付近を「上がった」と「方」をつけて称することは、古く狂言あたりに見え、室町時代には一般的になっていたらしい。「かやうに候ものは北国がたの者にて候、某いまだ上^がたを^たを一見仕らず候間」（狂言・通円・虎明本）など。この上方とシモ（九州）との中間の距離が中国地方の「中国」である。古くは『太平記』に、「先山陽道ノ路ヲ開テ中国ノ勢ヲ著ケ、推テ筑紫へ御下候へカシ」（巻一六・慶長古活字本）と見えている。上方は都の近辺を、いわゆる五畿内（拡大した近畿の名称は明治以後）とほぼ同様に指し、狭くは京、大坂の二都市をさしたようである。なおここでとり上げる地名は、京都大坂を中心にしながら、現代に伝わる地

名、現代の京阪都市圏を問題とするため、京阪神の三大都市とその都市圏のひろがり、奈良や、五畿内の外ではあるが和歌山、大津あたりの地名もあわせてとり上げることにしたい。なお地方を広くシモとよぶ習慣は現代の古老にもなお存するようで、先年河内の農村部で古老と面談中、同行の友人に古老がどちらから来たかとたずね、東京からと答えると、「ああシモの方か」と言われ、驚いたことがある。このようなカミの地域としての矜持は当然ことばの上にも現れる。地名にも上方としての個性の歴史のつみ重ねがあるはずである。近年の町名変更や団地新町名の誕生に際して、東京模倣の地名が全国的に急増し、歴史とことばに自負を持つ上方地域さえ影響されつつある今日、上方の地名の個性とは何か、ということとを問い直すことが、上方文化の新たな振興の上で必要ではないかと思う。

二 地名の歴史的価値

上方の地名の大特色はその歴史の古さと、長く中央の歴史でありつづけたこと、その歴史を地名に残していることにあるであろう。

地名の歴史的価値はその永続性にある。平安時代の建

物の残っていない洛中で、目に見える形で残っている平安京はその地名である。四条高倉と書かれたバス停に立てば、平安京の四条大路と高倉小路の交差点に現に立っていることが実感される。奈良の平城京も三条通など現に平城京の東の延長（外京）に中心街の名として継承されている。明治の町名であるが上京区の中務町は中務省跡にちなみ命名され、大内裏の官衙の位置を示している。失われた建物のおとを物語る唐橋羅城門町などのほか、建物の移動したおとも地名が旧地を示し、その歴史のおとを読みとらせるものもある。たとえば織田信長が明智光秀に襲われた本能寺は今も大きな寺で寺町御池下ルにあるが、この地に移ったのは本能寺の変以後のこと、事件当時の旧地（六角油小路の東）には現に本能寺町、元本能寺南町の町名が残っている。元誓願寺通（上京区）、元百万遍町（上京区）などもこの種の旧地を示す地名である。

パリで地下鉄に乗ったことがあるが、地下鉄の路線図を一覧すると、ポルト・ドゥ（門）の名を持った駅がパリの外周部に、映画の題名になったこともあるリラの門や、地下鉄の路線終点駅（行先）になっているオルレアン門、クリシイ門、クリニャンクール門、ラ・ヴィ

もりくの長谷小国（巻一三）のように長谷ながたにの字をあてた例が見える。しかし「ながたにの」という枕詞の使われた例は見えない。おそらくそのような歌われ方があったからこそ、このような文字づかいが成立したのであるが、これらの例は地名に古語が残るだけでなく、古い文学も残るといふことを物語ると思う。万葉集に収められた歌には含まれなかったけれども、「ながたにのはつせ」「ひのしたのくさか」とうたわれた文学の断片の残存を地名に見る、ということである。今、散佚して伝わらぬ文学作品で、引用の形で名称のみが、あるいは一部の文章内容が知られている作品があるが、（たとえは『更級日記』の中に題名の出でくる「とほぎみ」「せり河」「しらゝ」「あさうづ」などやロドリゲス『日本大文典』の中に例文として引用された形で断片的に内容の知られる「加津佐物語」その他の物語など）これらの歌枕地名の文字は散佚文学の痕跡地名として注目してよいと思う。

文学地名を現代に活用した町名もないわけではない。神戸市の須磨区は古典文学にゆかりの深い地域であるが、須磨に流された在原行平の事跡を、謡曲「松風」を主にもとにして、明治末から昭和初めにかけて、行平町

のほか須磨浦の娘の名から松風町、村雨町、「立ちわかれ稲葉の山の」の歌を残して、かたみに衣を松にかけたことから、稲葉町、衣掛町（衣掛けまち）、行平のながめた配所の月から月見町、月見本町などが一連の町名として作られている。

四 京大阪の地名のちがい

京都と大阪は「そうダス」と「そウダス」、「よろしオス」と「よろしオマス」の敬語の語形のちがいのように、同じ関西弁と言われながらも、ことばの相違が若干ある。地名にもこのような対照的な型が若干は認められる。大路に対する「小路」は京都では押小路（おせこうじ）、塩小路（しほこうじ）などコウジであるが、大阪では駅名にもあるように、小路（ちようじ）（千日前線）、森小路（もりしょうじ）（京阪線）など、ショウジである。『日葡辞書』には Kōgi, Fosomichi と見える。この京阪のちがいについては、江戸初期の全国方言集『物類称呼』にも「小路こうじ京都にて称す、江戸にて横丁（よこちやう）と云……又、大坂及伊勢松坂にて小路（しょうじ）と云」とあり、文政ごろの『浪花方言』（別名『浪花聞書』）にも、「せうぢ、小路こうじ也、こうじとは決して不言」と対照している。京阪のちがいとして早くから注目されたものらしい。

い。現代の町名としても、生野区小路、小路東、旭区森小路、岸和田市春木大小路町、門真市小路町、吹田市小路、寝屋川市小路、箕面市西小路、東大阪市横小路町、などいづれもショウジとよむ。豊中市少路は「少」の字を書く。堺には阪堺線大小路駅がある。ただし泉南市は中小路。神戸市にもと小路の字があり、阪神国道線小路停留所があった。和歌山市にも蔵小路の町名がある。奈良市は押小路町、今小路町、北小路町など京都と同じコウジである。京都とともに古い型を保つものである。奈良県内でも天理市は小路町である。

先に挙げた四条高倉のような京都の平安京以来の通り名の表示法は、長いようで実に合理的である。座標を求めめるように、位置を明確に知ることができる。これに上ル、下ル、東入ル、西入ルの表示を加えることにより、町名番地いらすのわかりやすい生活地名になっていることは周知のとおりである。ニューヨークの Third Avenue East 34th Street (三番街東三十四丁目) などの方式に相当する。北海道の計画都市にこの京都の条の名とアメリカ式の丁目加わって、札幌の北四条東五丁目のような条丁名のシステムが北海道にふえていった。札幌は最初は七条まで (明治一四年) であったが、現在では

拡大して北は五十一条に及んでいる。京都は東西が条であるが、北海道では南北線につけられたところもあり、名寄市東三条、西四条通のような名称にもなっている。

京都では東西が「条」、南北は「通」であるから、大阪が「筋」を南北路とするのとは異ってくる。「筋」は地理的な意味で用いられた最初は方角をさしたようである。「源氏物語」(帚木)に「例は忌み給ふ方なりけり。二条院にも同じすぢにて。いづくにかたがへん」と「方違へ」のことが出てくる。鎌倉時代の語源随筆「名語記」にも「方角ニムケテ、アノスヂ、コノスヂ」と見える。その後、道そのものにも用いられるようになり、「日葡辞書」には Michisagi の語が見える。先に引いた「浪花方言」には「筋、町々の通り、江戸にて本町通り日本橋通り杯云処を堺筋心斎橋筋……などいふ」と見える。

京都は条・通が基本だから、「筋」はほとんど用いられない。宮川筋(東山区、南北路)などがわずかな例外である。東西も四条通のように接尾語は通である。大阪は御堂筋、心斎橋筋、松屋町筋など南北が筋、末吉橋通など東西が通を基本とするが、まれには八幡筋のような東西の筋もある。近年新設の南北路にも「なにわ筋」の

ように筋の名をつける。地下鉄が南北に走る各線を御堂筋線、四ツ橋線、堺筋線、谷町線と名づけたのは一貫性があつて好ましい命名である。その中で千日前線だけはちよつと異質である。いかにもこの線は野田阪神へ桜川間の南北だけでなく、そこから東行して千日前通を通る（ただし千日前という駅はない）から、名が体を表わしていないとは言えないが、千日前という、むしろ、歴史的にも盛り場としても南北の千日前筋の方を連想する。そして路線の一貫性から言えば、この線も南北名称がほしかった。ただ阿波座から桜川に至る南北路部分は地下鉄工事のできた新しい道路であり、筋の名称がなかったから名づけようがなかったのであろう。極端に言えば、なにお筋のように新しい名をつけてでもそれを線名にしてほしかったとも思うが、たとえば一案としては、古くからの橋の名であり、交通の要地であつた汐見橋を通るので汐見橋筋とし、汐見橋線とすることが考えられる。南海汐見橋駅とまぎらわしく、かつ地下鉄に汐見橋駅がないことが難点ではある。なお、もし中央線と同じく東西が主の路線だと言うならば、中央に合わせて南線でも良いと思う。ミナミの繁華街を横断するのだから。神戸も南北を筋とする点大阪式の新しい適用であらう。生田

前筋、鯉川筋、穴門筋、宇治川筋、再度筋またたび、京町筋など。東西には中山手通、元町通など通である。

京大阪の今一つの地名型のちがひとして、えびす神社による地名を挙げたい。京都では夷川通、夷町、夷之町、夷馬場町、蛭子町、蛭子水町、恵美酒町、恵比寿町、恵美須屋町などで、夷、蛭子の字が多いのに対して、大阪では今宮戎の神社名をはじめ戎本町、戎橋であり（浪速区には恵美須東・西も）、堺には戎島町、戎之町がある。さらに各地への用字のひろがり方を見ると、「戎」は岸和田、泉大津から西宮戎、西宮の荒戎町から神戸、鳥取、防府、光、土佐清水、室戸、八幡浜、岐阜など主に西へと認められ、それに対して「夷」は福知山、富山県滑川、新潟県上越（直江津）、両津など京都から北へのびている。蛭子は大津、名古屋、石見大田、浜田、観音寺、小倉、山田、島原、中津などと京都から広く九州に及んでいる。こうした字の流行が京都中心と大阪中心と二つの核で認められる。

五 京阪神の地名の個性

京都 さきに見た平安京以来の条、それに伴う坊、大路、小路、地名に残る寺社名その他門や建物の名など

が多く見られること、言うまでもない。ただし朱雀大路が千本通になったり、五条大橋が六条坊門小路につけかえられたため五条大路もそちらへ移動（現在の松原通がもとの五条）するなど、名称の変更や位置の移動も少ない。そして洛中の町名はかなり多くは近世の商業都市のそれになっていて、その点は大阪とあまり変わらないともいえる。天正年間の秀吉の都市改造によって、平安

京以来の正方形の町割の間に南北路を入れて短冊形の町割に変化したのが、この種の新街路はもちろん両替通とか衣棚通のように商業地名である。さらに平安京以来の通も富小路が麩屋町通、土御門通が上長者町通などと改名されている。同通室町西入ルに元土御門町の町名が残っている。洛中の整然とした町名、街路名に対して、洛外に出ると、旧の村字名がそのまま町名になって、大字小字時には中字などもそのままかかえこんでいるため、右京区嵯峨二尊院門前北中院町などの長い町名が多い。

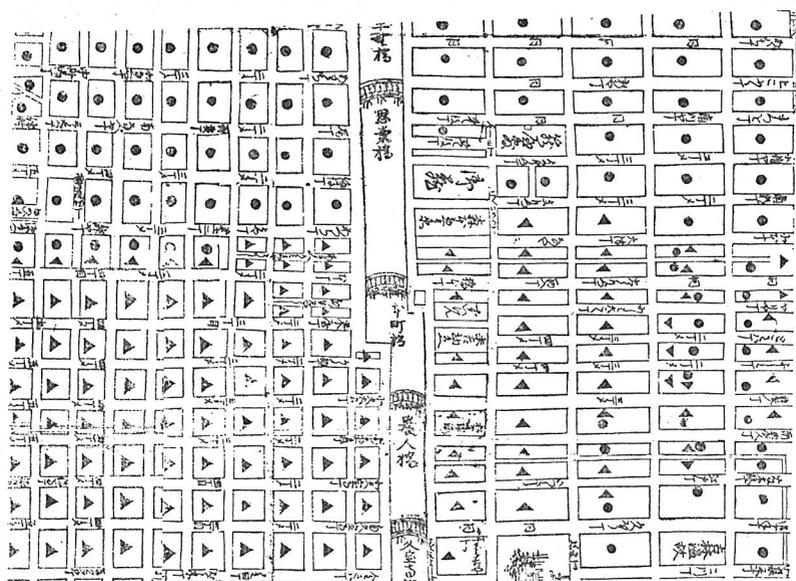
大阪 先述の「筋」のほかに、堀の開削者や新田開発者による人名地名がかなりめだっている。安井道頓の開削した道頓堀、岡島嘉平次の干拓した恩加島新田（現在の大正区北・南恩加島）、豪商淀屋常安の名から常安町（この町は最近変更され、今常安橋の名のみ残る）な

どがある。古代大陸交通の要地として、渡来人関係の地名も多い。現在関西線の貨物駅にその名を残す、百濟、呉の転訛といわれる平野区の喜連など。また東区の高麗橋は朝鮮国使のために架けられたとも、橋の東に古代の難波高麗館があったためともいわれる。

大阪には上六（上本町六丁目）のような、主要な交差点を略称する通称がよく使われていて、地図にこそそのらがないが重要な生活語になっている。略称するものはほぼ決っていて、勝手に略称しても通じない。だからこのような生活語地名も、公称でないからといって割愛せず、地図上に注記することが望まれる。筋の名でさえ入れない市街図が多い。その点、市バスの方向表示で、上本町六丁目の上と六の部分を大きく書いて、一目でウエロクという文字が目に入るようにしているのは、市民生活に即した良いサービスだと思う。略称される主な交差点は上六のほか上九、谷六（谷町六丁目）、谷九（同九丁目）、日本一（日本橋筋一丁目、ポンイチとも）、梅新

（梅田新道）、天六（天神橋筋六丁目）など。大体において丁目つきの長い停留所名（もともと市電の）の交差点が多いようである。

大阪の商都らしい地名といえば、先にも触れた水運の



堀の名のほか、八百八橋と称された多くの橋の名、南区の瓦屋町、笠屋町、畳屋町、北・南炭屋町ともの間屋町、南綿屋町、鍛冶屋町などの「〱屋町」、東区の唐物場淡路町、安土町、伏見町など各地商人の出身地による町名、西区の京町堀、土佐堀・阿波堀など伏見京町、土佐、阿波の商人による町から堀川の名も出た型がめだっている。また中之島には往時の諸藩の蔵屋敷の名が肥後橋、筑前橋、越中橋の橋の名に残る。このように市内の各地区にそれぞれの個性があることが興味深い。

神戸 神戸の特色といえば、新しい国際港湾都市としての、現代的な地名、洋風な地名ということになるだろう。もちろん歴史の古い兵庫津を継承した土地でもある。『平家物語』をはじめ『太平記』そのほか文学にゆかりが深い。大部分は近代に町名としてつけられたものではあるが、清盛の邸址から雪御所町（兵庫区）、忠度の腕塚から腕塚町（長田区）、教盛の青葉の笛から青葉町（須磨区）、楠木正成にちなんで楠町（中央区）、正成の幼名により多聞通（中央区）などが見られる。なお兵庫区の福原町は福原京の旧地ではなく、明治元年に開業した遊廓に東京の吉原、京都の島原の繁栄にあやかり、

かつは清盛の福原京の名にもちなんでも福原と名づけたものという。神戸の町を特徴づけている多くの坂の上には外人が住んで、ハンター坂とかジュームス山などの人名がつく。トリアホテルに至る道がトア・ロードとよばれる。芦屋の岩登りの適地をロックガーデンと名づける。

外国語を無関係な新しい町につけた違和感とは異なり、神戸では洋風文化の根づいた近代の歴史がある点で、神戸らしい個性の中に調和していて、異質さや軽薄さを感じさせない。戦後新しくフラワー・ロード、ポート・アイランド、三宮センター街などがつけ加わっても、既成の欧風地名とほどよく調和して神戸の町にとけこんでいる感じである。かえてポート・アイランドを「港島」と直訳して町名にしたことが神戸としては違和感を覚える。ポート・アイランドの名から受けた新鮮な現代性は失われ、しかも「港島」という漢字から受ける印象は何とも平凡な味気ないものである。なお、神戸では北に山、南に海の地勢から、方角に「山側」「浜側」の語がよく使用される。

六 歴史の継承と新しい地名の創造

由緒ある歴史的地名を守ることはぜひとも必要である

上方の地名

が、新しい住宅団地の町名などには、清新な創造的な名が生れていくことを促進しなければならぬと思う。とかく旧名保存だけに関心が集まり、新しい名を軽視することから、結局平凡なつまらない名がふえることになるのだと思う。たとえば文教地区を表わす町名で、東京の文京区を模倣した名が全国的にふえているが、そもそも「東京の文教地区」を「文京」と表わすこと自体が日本語としておかしい、その文京も東京だからまだ意味があるが、「京」の字がついたまま全国各地で模倣するのは全くナンセンスである。赤平、恵庭、むつ、弘前、秋田、新潟、水戸、土浦、古河、前橋、木更津、相模原、一宮、福井、武生、坂出、松山、宇和島、宇部、津久見と全国二十市が文京(町)を作った中で、幸いにして近畿地方には今のところ全く見られないのは、このような流行に影響されない上方の見識として喜ばしいことである。文教地区を表わす他の表現で上方に例の多いものといえば、それは「学園」である。奈良市の学園駅前駅付近の学園北、南、学園朝日町、学園朝日元町、学園大和町、大東・茨木・摂津市の学園町、東大阪市の西堤学園など。東京近辺にも大泉学園、玉川学園などの町名はある。神戸市垂水区すなはちの学が丘(八代学院大学など五つの学

校がある)などはちょっと他に例のない個性的な名づけといえよう。神戸近郊にはほかにいろいろな個性的な命名がある。たとえば北区の鈴蘭台のとなり君影町という新しい町ができていたが、これはスズランの別名キミカゲソウの名を使ったものと思われる。南鈴蘭台などというよりも、ずっと個性的でおもしろいと思う。

住宅団地の町名「〓台」は駿河台、赤羽台などの東京型が全国にひろまったものだろう。高台を売りものにする名称として全国に急増し、これは関西もすっかり一般化した。泉北ニュータウンは一六の町名全部が桃山台などの台に統一されており、中には鴨谷台など谷がなぜ高台か首をかしげる名もある。御池台もある。千里ニュータウンにも古江台がある。

このような台に対して、上方型の住宅地名として見直したいのは「〓の里」である。高台志向の台にくらべて、やさしい、ゆとりを感じさせる名称ではなからうか。しかもこれは大半が大府付近に集中し、地域的個性を發揮している。阿倍野区の文の里、西成区の岸里、松原市の高見の里などは駅名にも町名にもなっている。駅名のみで町名になっていない例がかなりあり、南海本線の吉見ノ里、井原里、近鉄奈良線の八戸ノ里、南大阪

線の土師の里、水間鉄道の近義の里駅(これは昭和四四年開業)などである。鉄道沿線の宅地開発にかなり好まれた地名型と見ることが出来る。大正期に見えはじめたものが多く、そのころのひとつの流行ともいえようが、新しいものもある。ほかに町名としては、城の里・柴の里(長岡京市)、黄金の里、登美の里町(高槻市)、藤の里(茨木市)、楠の里町、明美の里町(大東市)、小山藤の里町(藤井寺市)、男里(泉南市)など、町名になっていない団地名では外院の里(箕面市)、梅の里(富田林市)等がある。なお大阪市には今里、豊里、湯里、柏里、野里、姫里など「の」のつかない里の町名も多い。

美章園、香里園、甲陽園などの「園」、武庫荘、永楽荘、六麓荘などの「荘」も阪神地方に多い。宝塚市花屋敷荘園のように「荘」と「園」とを合わせた型もある。恵我の荘など「しょう」とよむものは歴史的な荘園地名を継承しているものである。これらは上方らしい宅地名として、もっと活用されてよい。

和歌山市には町名の接尾語に、丁・町の字により明確な読み分けがある。橋丁、北町など。仙台のほかこの区別のあるまちはかなりあったが仙台は「町」の字に統一してしまい、大阪市南区にもあった瓦屋町一番丁等も

瓦屋町一丁目等に改められた。主要都市でこの区別がほぼ健在なのは今や和歌山市だけである。和歌山も周辺部にはく町もあつたし、住居表示で秋葉町などがふえていゝ。和歌山も今や区別あやうしである。せつかく文字の読み分けができるものを無用の統一をすべきではない。堺市は丁目を綾之町東一丁とか新しい町名にも竹城台四丁とか表示しているが、これも堺市の個性であり、他の都市に合せて丁目にする必要は何もないと思う。最近天神橋筋を天神橋に改称したことなども、筋をとっては橋から長く続いている町の意味がなくなつてしまふ。大阪の個性としての「筋」の名をもつと大切にしてもらいたい。堺東、西宮北口などの用法も関西型の個性であろう。南田辺、東淀川など上接型が従来なかつたわけではないが、最近の命名には南茨木（阪急京都線、万博の時に新設）など、全国的な上接型が多くなつてきている。かな地名がふえているが、羽曳野市はびきの、のような不ぞろい、宝塚市売布きよしが丘のようにむしろ売布の方こそかな書きすべきもの、など問題も多い。大津市におの浜、奈良市あやめ池など、かな書きがほどよく成功したものもある。

歴史地名の多い上方として、その正しい継承のために

は、歴史的な名を現代に使えばよいというものではない。歴史的な事実に戻したり、歴史に合わない位置に名づけたるならば、歴史的な名を使つても、歴史を尊重することにはならない。平安京の大路は九条までなのに、大正初年にはその南に十条通が作られている。朱雀は南方の神であり、朱雀大路は宮殿から南下する道であるのに、最近奈良市の北郊に開発中の平城ニュータウンの一面を朱雀と名付けているのは、平城京の北であり、おかしい。歴史的な地名の正しい継承を図ることは、歴史ある地域としての上方の責務であろう。さきに見た大阪の堀の名なども堀は埋めてもその歴史がわかるように、正確な位置で町名や街路名に残したい。全国的に安易な東京模倣の地名がふえている中で、古い歴史と、現代の多様な発展を持つ上方の、これまで見てきたような個性特色が、いよいよ発揮されることを、先進文化地域としての上方のために祈りたい。

（岡山大学教授）